



“ホ長調の世界” — ホ長調の名曲を探る



プログラム

これまで“調性”を特集するシリーズとして短調で書かれた名曲を7回に渡ってお聴きいただいて来ました。今回からは長調のシリーズがスタートします。第1回はホ長調で書かれた名曲をお送りします。バッハのヴァイオリン協奏曲第2番は明るく活気に満ちあふれた第1、第3楽章の間に荘厳な響きを持った第2楽章が置かれ、格調の高さを感じさせるバッハならではの名曲です。ヴァイオリニストのバイブルとも言われる傑作が無伴奏ヴァイオリンのための6曲のソナタとパルティータです。パルティータ第3番は全体に明快で華麗な曲想が特徴で、輝かしさ、優雅さを持った名作。甘美なメロディーラインが美しいショパンの練習曲第3番は「別れの曲」として親しまれている名曲です。ドヴォルザークの弦楽セレナードは、しっとりと落ち着いた響きの中にどこかノスタルジックな情感をかき立てます。チャイコフスキーと並んでこのジャンルの傑作のひとつです。ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第30番は自由で即興性の強い第1楽章から主題と6つの変奏曲からなる第3楽章まで、無駄な音を省いて凝縮したような奥深い響きを持った名作です。ブルックナーの交響曲第7番は初演時から大成功を収め、その名を一気に高めた名曲で、他の交響曲に比べ美しさが際立ち、ブルックナー特有の分厚い響きと力感、そして親しみ易さも加わって独特の地位を占めています。今回は、ホ長調の名曲をたっぷりお聴きください。

ヨハン・セバスティアン・バッハ (1685~1750): ヴァイオリン協奏曲第2番ホ長調BWV.1042

ヨゼフ・スーク (ヴァイオリンと指揮) / スーク室内管弦楽団
(1997.8.25 王子ホールでのLive)

無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第3番ホ長調BWV.1006 ~ 第1曲“プレリュード”

イダ・ヘンデル (ヴァイオリン) (1995年録音 CD盤)

第3曲“ロンド風のガヴォット”

イヴリー・ギトリス (ヴァイオリン) (1990.7.30 サントリーホールでのLive)

フレデリック・ショパン (1810~1849):

練習曲集p.10~第3番ホ長調“別れの曲”

マレイ・ペライア (ピアノ)
(1993.9.30 ウィーン・ムジークフェラインサールでのLive)

アントニン・ドヴォルザーク (1841~1904):

弦楽セレナードホ長調op.22~第1楽章、第2楽章、第5楽章

カール・ミュンヒンガー指揮シュトゥットガルト室内管弦楽団
(1982.11.11 東京文化会館大ホールでのLive)

*** 休憩 ***

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827):

ピアノ・ソナタ第30番ホ長調op.109

マウリツィオ・ポリニーニ (ピアノ)
(1998.4.25 サントリーホールでのLive)

アントン・ブルックナー (1824~1896):

交響曲第7番ホ長調~ 第1楽章から、第2楽章から、第4楽章

クリスティアン・ティーレマン指揮ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団
(2005.11.18 ミュンヘン、ガスタイクホールでのLive)